

学都屋台食談

第7回

金沢で過ごす学生生活の意義や仕事観・人生観を、石川県に拠点を構える企業経営者や大学学長らが講師となり、講師の経験をもとに学生と語る「学都屋台食談」が11月10日から12月2日にかけて、金沢市の片町中央味食街で開催されました。2006年から今年で12年目を迎え、講師と県内の大学に通う学生が和やかに繰り広げた食談で、講師が学生に熱く語られたメッセージを紹介します。第7回は三谷忠照・三谷産業株式会社代表取締役社長。

 三谷産業株式会社

電子新聞の開発に のめり込んだ学生時代

僕は皆さんと同じ大学生だった時、共同通信社と慶應義塾大学との共同研究で電子新聞の企画開発に携わりました。

共同通信社側からいただいた、「若者の新聞離れを防ぐにはどうしたらいいか」というテーマに対し、全面タッチパネルで本のように読める折り畳み型デバイスを開発して提案しました。スマホやタブレット端末がまだ普及していなかった2007年からのことで、最初に、1000人ぐらいの大学生にアンケートやインタビュー調査を行い、さらに山手線を何周もして、乗客が新聞や本をどのようによく読んでいるのかを観察するフィールドワークを実行しました。

そこから、若い人も実は新聞を読みたがっているし、有益なコンテンツであるものの、新聞紙という「ボードウェア」については、現代の若者の生活習慣によりフィットしたものに進化させる必要があるのではないかとの結論に至り、どのような形状や大きさ、表示方法が新たなハードウェアとして適しているかを考えることにのめり込みました。

自分で面白いと感じることは 自分でしか分からない

振り返れば当時の僕はとても勉強不足で、今ならあの会社やこの会社と連携すればいいといったことがすぐ思い浮かびます。大学を4年で卒業できなかったという代償も払いました。それでも当時の僕にとっては大変面白く、楽しい、宝物のような時間を過ごせました。

皆さんも、20代前半までの間に、自分の取り組むべき課題や、ちよつと心に引っ掛かったり、気になったりすることを大学での学びの中や学生生活、もしくは社会の中から見つけられるはずですよ。

そして、そのことに対し自ら進んで取り組むことで、社会の一員として問題や課題の解決に貢献できますし、自分自身を成長させるきっかけになると思います。

もしかしたら、他の人が通った道かもしれ

ません。でも、自分で面白いと感じることは自分でしか分からないのですから、自分の興味の赴くままに、探求に乗り出してみればいいのではないのでしょうか。

金沢は東京とは違う感性を 得られる懐の深いまち

僕は高校、大学は東京で過ごし、大学卒業後はアメリカで就職しました。こちらに帰省するたびに金沢は「発見」のあるまちだなと感じていました。

金沢は県外の人から「古都」とか「小京都」と形容されることが少なくありません。しかし、実際の金沢はそんなカテゴリーに当てはまらない、新旧の時間軸が交差する都市です。分かりやすいところであれば、金沢21世紀美術館と、金沢城や兼六園が隣り合わせにあつて、お互いが成立立っています。そうした懐の深さがこの土地にはあります。

現代の金沢に伝わる数々の伝統工芸も、江戸時代は前衛的でした。当時の進取の精神が今も脈々と受け継がれ、東京の流行やセンスに引っ張られない、独特の感性が金沢には息づいています。

皆さんも金沢で学ぶ中で、自分なりのアウトプットにつながる何かを、きつと「発見」できるのではないかと思います。東京とは違う感覚を得られる時間を生かし、自分自身が面白いと感じられること、興味を持てる対象を見つけていってください。

興味の赴くままに探求に乗り出してみよう



講師

三谷産業株式会社
代表取締役社長

三谷 忠照氏

みに・ただてる

1984年生まれ。2009年慶應義塾大学経済学部卒。同年より米国サンフランシスコのベンチャーキャピタル、デフタパートナーズにて勤務。現地で起業の経験も持つ。10年に三谷産業取締役就任。12年に帰国し常務取締役。主に人事や労務を担当し、17年6月代表取締役社長に就任。



参加
学生

前列左から橋侑利さん(石川県立大学2年)、須戸菜月さん(金沢星稜大学2年)、後列左から小林悠人さん(金沢工業大学2年)、定見謙吾さん(金沢大学2年)、西田早也香さん(金城大学4年)

企画/榊都市環境マネジメント研究所